22

不破家華岡流手術図について

○山内　一信[1]・不破[2]　洋

華岡青洲は手術にあたって患者にその内容を説明し、手術手技を彩色を使って見事に表している。多くの門人達もその手技に従い手術を行い、手術記録を残したと思われるが、実際に残されているのは少ないようである。華岡青洲門人の一人であった三島良策（後に不破為信則明（廉齋）と改む）およびその子の不破為信惟治（杏齋）は美濃中島郡不破一色村にて華岡流の手術を行い、その記録を残した。本研究ではその記録を分析し、当時の医療内容を検討するものである。

三島良策は美濃中島郡不破一色村に住居する医師で、家は曽祖父より医業を専らとした。文政六年（一八二三）十一月朔から同年九月にかけて青洲春林軒に入門し、師の手技手法を会得して不破一色村に帰村し、多くの手術を行った。良策は帰村後、三島為信と名乗り、さらに嘉永二年からは不破為信と称した。その子為信惟治（杏齋）は文政十二年（一八二九）十二月七日廉齋の長男として生まれ、嘉永三年（一八五〇）二月から嘉永五年（一八五二）十二月まで青洲の高弟、高階丹後介経宣に入門し、これまた華岡流の外科手術を得意とした。安政六年（一八五九）四月に父の跡を継ぎ、明治三十二年五月十三日（六十九歳）に没している。

不破家に残された手術図資料は八十四枚で、これを患者の名前、州、郡、年齢、性別、罹患期間、病名、手術年月日、術者名などについて分析した。このうち二十九枚は廉齋の、五十四枚は杏齋の、残りの一枚は杏齋の実弟間崎周治の記載したものである。手術例数は八十四回あるが、このうち二度手術をしたものは二例、三度手術したものは二例あった。年齢は十一歳から六十八歳まで、平均四十二歳であった。患者の出身は四名が武家関係、他は農民あるいは商人と思われる。居住地は美濃が四十五名と最も多く、ついで尾張三十二名、その他伊勢、三河、飛騨などからの受診者であった。症例は乳癌が最

も多く再手術例を含めて六十三症例、その他肉溜などが散見された。乳癌は右側乳房二十九例、左側二十三例であった。乳癌のうち、何例かは術前にその手術内容について説明しており、なかにはもはや手遅れであり、再発の可能性のあること、もし再発しても手術の責任でないし、治ったとしても医療のせいでないことが述べられているものもあった。再発の危険性が記載されているのは、重症なものほどその傾向があった。

分析した資料は不破家で手術されたものの全部が残っているとは限らないので、統計的に分析すること自体問題があるかもしれないが、当時の医療状況をある程度は推測できる。この分析から地方においても乳癌手術はかなり行われていたことがわかる。またすでに再発のあることもわかっており、特に腫瘤が胸壁に付着しているもの、翻花しているもの、腋窩に転移しているものは予後は悪く、そのことを説明した上で患者がどうしても手術を希望すれば行っていたようである。勿論患者の承諾の署名はない。当時全身麻酔による外科手術が美濃でどの位行われているかはよくわからないが、その手技のできる医師はきわめて少なかったと思われる。従ってその手術についての評判を聞いて、他州からも患者が集まってきた可能性が高く、その地域は思ったより広い。麻酔法は師と同様に麻薬（麻沸散）を用いている。術式も青洲の方法と同様な形で行われたと思われるが、切除法などは具体的には示されていない。これが当時の記述の習慣であったのか、あるいはわざわざ詳細に記載せずに未熟な医師がまねることをふせいだのかもしれない。

（1）名古屋大学医学部附属病院医療情報部）
（2）不破医院）